

毛皮交易史の研究(5)

— 毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度 —

下山 晃

はじめに

第I章 中世「国際商業」の展開と毛皮貿易

- 1 ヴァイキング
- 2 ロシア商人の起源
- 3 ハンザ同盟の抬頭
- 4 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇 (以上, 51号)

第II章 ユーラシア毛皮交易圏

- 1 ヨーロッパ=イスラム商業圏
- 2 モンゴル帝国と毛皮取引
- 3 モスクワ商人とヨーロッパ市場 (以上, 52号)

第III章 植民期アメリカの毛皮貿易

- 1 白いインディアン
- 2 ハドソン湾会社の創設
- 3 セント・ローレンス商業帝国 (以上, 54号)
- 4 ニューイングランド連合 (4~6は割愛)
- 5 製帽工業と重商主義
- 6 人種奴隷制プランテーションと毛皮

第IV章 毛皮の世界フロンティア

- 1 コサックの東漸
- 2 アリュシャンの受難
- 3 ノア=ウェスターズ (以上, 57号)
- 4 アスターズ・トラストと広東貿易
- 5 アメリカ西部の毛皮フロンティア (以上, 本号)

第V章 極東の開国と毛皮

— 世界フロンティアへの三つの通路

- 1 中露陸路貿易ルート
- 2 夷館取引の展開
- 3 日本の開国・文明開化と毛皮

おわりに

— 掠奪のシステムの帰結

4 アスターズ・トラストと広東貿易

ここで紹介するジョン・ジェイコブ・アスター [1763年～1848年] は、北米大陸のフロンティアにおいてイギリス、フランス、スペイン、ロシアの各列強、そしてイギリス領北米植民地への移住者たちが入り乱れて土地の先取権を争い、毛皮圏確保のための壮絶な闘いをくり広げていた頃に、ひとりヨーロッパで取り残された感のあった後進ドイツの田舎町ヴァルドルフに生まれた。フレンチ＝アンド＝インディアン戦争が終結した年の7月17日のことである。祖先はフランスを逃れ出た謹厳なユグノーの家系と言われ、父は貧しい肉屋であった。浪費家の父は酒色に溺れ、妻の死後まもなく再婚したが、実母への思慕の強かったアスターは継母にはなつかなかつた。継母は後に家を離れ、父との軋轢は深まるばかりであった。しかし学業は優秀で楽器を巧みに操り、気立ては優しく、特に年長者に好かれる模範生として、学生時代には評判は高かつた。開明的な教師からアメリカ独立革命の話聞き、アスターは大西洋を隔てた新天地に自由な生活やビジネスの無限の可能性があるとの思いを少年時代から抱くことになった。ただし、父の仕事を手伝うため、学業は14歳で中断している⁽¹⁾。

16～17歳の頃、ロンドンで楽器店を開く兄のもとで働くべく渡英、この時アスターのポケットにはわずか2ドルしか持ち合わせがなかつたという。「正直かつ勤勉、ギャンブルは無用」をモットーに身を粉にしてアスターは働いた。しかし4年間かかって蓄えることが出来た貯金は、フルート演奏のアルバイトでの稼ぎを含めても上等の背広1着分、高だか75ドルで、英語を身につけたこと以外に何ひとつ充実感はなかつた。アスターは当然、ロンドンでの貧しい現実生活よりもアメリカへの移住に夢を託すようになった。20歳の時、1784年の新年早々にイギリスでの生活に見切りをつけると、25ドル分の英貨と7本のフルートに少しばかりの着替え類をトランクに詰め、バルチモア行きの移民船に乗船、大西洋を越えた。そしてその船が Chesapeake 湾で氷に閉じ込められて3か月ものあいだ立ち往生したことが、このうだつの上からぬ貧乏青年に、世界一の富豪として飛躍させる最初の好機を与

えた。

その船舶には、運良く、ハドソン湾会社の役員だという人物が乗り合わせていた。そしてアスターは、この役員や他の旅行家たちからアメリカにおける毛皮取引の利益の大きさをくり返し吹聴され、ニューヨークで楽器を売り、それを元手に毛皮取引に従事するよう強く勧められた。意気揚々とニューヨークに降り立ったアスターは、ひとまずはパン屋の小僧を皮切りに行商人となり、また今ひとりの兄と共にしばらくのあいだ肉牛輸送の会社アスター・アンド・ブロードウッド社を経営したり、楽器を売ったり、その他さまざまな職業に携わって商人としての才能に磨きをかけていった⁽²⁾。彼がいつ頃から毛皮取引に従事しはじめたかについては研究者の間で意見が分れているが、その年の内に一旦ロンドンに帰り、直ちに大金を得たと見るのが妥当かも知れない。というのは、アスターは、彼の商才に期待した裕福な船主トッドの娘サラと85年には結婚しているからである⁽³⁾。

サラの300ドルの持参金を元手にアスターは一気に事業を拡張しはじめたが、岳父のキャリアによってアメリカとヨーロッパを結ぶ手広い取引活動は一層身近なものとなり、人脈も広がっていった。この年には毛皮を求めてハドソン河を遡り、果敢な探検活動をはじめて体験した。そして1787年のある日、手持ちの毛皮を携えてロンドンに渡り、それを売ってみたところ、やはり信じられぬほどの利益に結びつくことがわかった。ロンドンでは、ニューヨークの5倍～10倍という高値で毛皮をひき取ってもらうことが出来たのである。ひとたび毛皮取引の有望なことを察知するや、アスターは人なみ外れた旺盛な商業活動を展開しはじめた。彼はヨーロッパの毛皮市場の情報を網羅的に収集し、わずか1年以内に毛皮の取引に関するありとあらゆる知識と技術とを吸収した。自ら狩猟者となり、とりわけモントリオールでは、アスターは“湖と森の領主 Les Seigneurs des Lacs et des Forêts”として、一躍名を馳せていた。彼は毛皮を売ってくれるインディアンや猟師が居る所なら、どんな辺鄙な場所でも困難を厭わずに出向いたが、同時に、代理店制度や取引店制度のネットワークを着実に拡げて行くという、当時としては奇

抜な先駆性も発揮している。ただし、今で言う「ネズミ講」的な狡猾な手段を利用していた形跡もあり、今後の詳しい研究が待たれる⁽⁴⁾。

ともあれ、遅くとも 1790 年代の半ばまでにはアスターはアメリカ合衆国で最大級の商人に申し上がっており、渡米後まもない内に一挙に 50 万ドルの財産を手に入れていた、と述べる研究者さえある⁽⁵⁾。一般の毛皮業者とは異なって、市場の調査を徹底して行い、できるだけ珍しい動物の毛皮を販売する方策を選んだことが、アスターの活動を初期のうちに成功させた第一の原因であったように思える。アスターが毛皮販売に着手しはじめたのが、独立革命後にイギリスとアメリカとの商業関係が好転しつつある時期であったことも、幸運であった。

妻の希望で、新婚時代には毛皮取引以外にも楽器や楽譜を売る商売に力を入れることもあったが、しかし、やがてはむしろ妻の方が毛皮取引の桁違いの利益に積極的な関心を寄せはじめ、色いろとアスターに助言や要望を述べるようになっていった。同時代のある歴史家は、「アスターの妻は自分の助言が毛皮取引の成功に結びついた場合、何と 1 時間に 500 ドルという法外な額の小遣いをねだったものである」と書き遺している⁽⁶⁾。当時 1 エーカー（約 40 アール＝4050m²）の西部の土地の値段が 1 ドル程度であったことに鑑みるなら、その「小遣い」がどれほどの金額を意味したかが推し量れる。アスターの妻の内助の功は、時給で数百万円に相当した、ということになる訳である。少々常識はずれの高価に過ぎる助言料ではあるが、しかし、アスターが飛躍する第二の好機が、このわがままな妻サラとの結婚にあったことは疑いない。――サラの助言は、アスター自身の行なった土地投機や探検活動ほどの損失には結びつくことはなかったからである。なお、この頃のアスターは武器商人でもあり、カリブ海域の船主や海賊、奴隷商人たちに大砲やマスカット銃を売って莫大な収入を得ている⁽⁷⁾。

ところで、当時北米において毛皮取引のメッカとなりつつあったのはモンドリオールであった。アスターは、フレンチ＝アンド＝インディアン戦争でフランス勢力が一掃された後にこの町に殺到したスコットランド商人やイン

グランド商人と時には協力し、また時には敵対しながら急速に頭角を現わしていった人物であった。毛皮は自前の船で需要の旺盛なニューヨークやロンドンの市場に送り出したが、当時モントリオールからニューヨークへの毛皮の直送は認められてはいなかったため、一旦ロッテルダムを経由してそこから毛皮を再輸出する、という方法をアスターは採用した。運賃コストを差し引いても、その場合の利益は少なくとも毛皮1着で3000ドルに達した。フランスで革命が勃発する1789年にはデトロイト辺りにまで進出し、例えば一度の取引で1万5000枚もの上質の麝香ネズミの毛皮を獲得している。毛皮を得るためにピアノをはじめとする楽器類を大量に仕入れ、1800年頃からは先に述べたように武器・弾薬・ウールなどを大量にロンドンから調達してもいた。不動産投資にも1794年頃より本格的に参入し、まずはマンハッタン島に幾らかの土地を買い求めている。“Buy de acre, sell de lot (まとめて買って、分売する)”というのが、彼の販売戦略であった⁽⁸⁾。ニューヨークの中心部は言うに及ばず、その周辺部でもアスターは次つぎと買い占めを行い、アメリカ合衆国で最大級の土地長者への道を歩みはじめる。無論、アメリカ最大の土地所有者として成り上がるまでには挫折やトラブルも多く、例えば94年にはニューヨーク北部の3万7000エーカーに及ぶ広大な共有地の帰属をめぐる、共同出資を行なった商人たちとの間にただならぬ争議が起こったりしている。死後取り沙汰されるアスターへの憎悪にさえ満ちた不評の種は、この頃に蒔かれたのである。

19世紀に入ると、アスターの事業は益々順調に拡大の一途をたどる。飛躍の第三のきっかけとしての、^{カン}東貿易の独占が軌道に乗るのである。アメリカとアジアの間の貿易が、何よりも毛皮商人アスターの活動によって軌道に乗ったという史実を省みる時、我々は毛皮の果たした歴史的意義の大きさを改めて確認せざるを得ない。アメリカ独立戦争の結果、大西洋貿易の要であった西インド諸島の市場がイギリスの圧力によって閉鎖されるに伴い、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアの商人（やや遅れてセイラム、プロヴィデンス、ボルチモアの商人）たちの目は、自ずと国内の西部フロンテ

イアや東洋市場の開拓へと向けられるに至った。この点、アメリカの独立が、中国を、ひいては日本を世界市場に結びつける大きなきっかけであった、と言えなくもないのである。事実、英領 13 州の植民地が独立を達成してアメリカ合衆国が成立（パリ条約締結）するのは 1783 年のことであるが、翌 84 年の 2 月には、早くも J・グリーンズを船長とするエムプレス・オブ・チャイナ号が毛皮を満載して出帆、8 月には南アフリカ＝インド経由で広東への入港を果たしている⁹⁾。このエムプレス・オブ・チャイナ号は中国産の茶や絹や南京木綿を積み込んで 85 年 5 月にニューヨークに帰還、対中国貿易がきわめて利益の大きなものであることを実証していた。12 万ドルという巨額の経費が費やされたものの、純利益は 3 万 727 ドルに達し、合衆国政府はわざわざ議会決議をもって関係者の労をねぎらったという。ただエムプレス・オブ・チャイナ号の場合、太平洋の北東海域で大々的に毛皮を集め、それを中国に売り込むという中・長期の計画を必ずしも明確に展望したものではなくて、当初の目論見としては単に試験的な派遣に終わったものであったし、しかも中国側は、この時アメリカ商人たちが持ち込んだカワウソやアザラシ、ビーバー、キツネなどの毛皮に対しては、二級品の評価しか与えなかった。ヨーロッパの毛皮市場に匹敵する巨大な需要を示しはじめていながらも、中国の毛皮市場では、何よりもラッコの毛皮だけが最新流行の特上品として求められていたのである。

そこで、アスターをはじめとするアメリカ商人は、太平洋北東海域に進出してスペインやロシア、イギリス、それにノア＝ウェスターズ（本誌 57 号参照）の勢力を駆逐し、ラッコ皮の取引をアメリカ商人の支配下に置く必要があると痛感しはじめた。アスターは、こうした時代の流れや国家的戦略の要点を見抜くのに、たぐい稀な才能を持ち合わせた人物であった。徹底した市場調査を通じて早くから中国市場の重要性に着目していたアスターは、まず 1796 年、ロンドン在住のイギリス東インド会社所属のある官吏と手を結び、すでに同社が太いパイプを持っている中国市場への毛皮の独占的輸出権を認めさせた。驚くべきことにこの契約は、イギリス東インド会社を媒体と

した中国とのアメリカ商人の取引権を、ほとんどすべてアスター一人の手に委ねる内容のもので、彼は自分の開拓した航路とこの契約とを存分に利用して、たちまちの内に中国貿易を独占していった。99年には、さまざまな東洋物産の広告販売を大々的に開始した。ボストン商人との角逐や密貿易の横行があったために中国貿易・茶貿易をアスターだけが独占するという事はなかったものの、結局のところ、建前としては米英両国政府のおスミ付きをもらった特権的毛皮商人はアスター以外にはないということになった。またアスターは、アラスカのロシア商人とは比較的友好的な関係を取り結んで必要物資の供給を進言し、最大のライバルと目された北西会社を追い落とす方針を当面は選び取った。北西会社が拠点としたモンリオールは、太平洋沿岸から見ればアメリカ毛皮会社が拠点としたセントルイスに比べ2倍に近い距離があり、輸送コストの点ではアスターのアメリカ毛皮会社が断然優位に立てる見通しがあった。太平洋の海路を牛耳っているイギリスの東インド会社の役員を取り込んでいることも、絶大な利点であった。アスターは有利な立場を自覚した上で、大胆にも北西会社に合併を申し出て、やがてこのライバル会社を一挙に消滅させようと画策する。無論の事この申し出は拒絶されるが、しかし、アスター側は北西会社の社員の多くを引き抜くことが出来たという⁽¹⁰⁾。そしてロンドン、ニューヨーク、ペテルスブルグなどには、アスターの手によって運ばれた東洋の珍奇な物産が雪崩込むことになった。

1803年、仏領ルイジアナがアメリカに買い取られてセントルイスがアメリカでも有数の商業拠点となり、ミズーリ水系の毛皮資源の開発に弾みがつくと、アスターはさらに、太平洋岸のコロンビア河の河口地域一帯をアメリカ領として確保し、対中国貿易の拠点とするべきことを確信した。1806年にルイスとクラークの探検隊が帰還して国民的英雄となったことで、その確信はすぐにでも自分自身の経済活動と具体的に結びつくものと感じられた⁽¹¹⁾。蒸気船登場のニュース(1807年)も、大陸の規模の、さらには世界的規模の取引を急速に進展させるだろうとの見込みを持たせていた。太平洋に注ぐコロンビア河の河口地域への進出により、アメリカ産毛皮の国際的商

品としての重要度はさらに高まり、アメリカへは茶や織物など需要の高い東洋の諸物産が流れ込み、アスターの手には想像もできぬほどの莫大な利益が転がり込むはずであった。

すでに巨万の富を得ていたアスターは有力な政治家との結びつきを色いろと画策し、1808年にはトマス・ジェファソン大統領によって合衆国北西地域の行政代理官に任命されることとなった。大統領との特別な繋がりにより、彼は一切の対外貿易を禁じた出港禁止法（1807年発令）の執行期間中にも係わらず、自由に中国との貿易を継続することができた。そして例えば、この禁止令のために捨て値で売りに出されていた商船9隻を買い受け、ニューヨーク＝ヨーロッパ間、ニューヨーク＝広東間の貿易路を確保していった。アスターの稼ぎは、この当時のものだけで優に20万ないしは25万ドルを超えたと伝えられているが、権威ある行政代理官の肩書きを得た彼は、早速100万ドルの資本金をもってアメリカ毛皮会社 American Fur Company を設立、ハドソン湾会社や北西会社に正面きって対抗しはじめた。同社の商船ビーヴァー号は毛皮を満載して中国に向い、茶や絹や木綿類 nankeens を大量に持ち帰った。そしてアスターは着々とアメリカ毛皮会社の支店網を拡げる一方、1810年には自身の名を冠したフォート・アストリアをコロンビア河の河口に建設、そこで太平洋毛皮会社 Pacific Fur Company（資本金40万ドル）を設立した。その翌年には南西部会社 The South West Company を相次いで設立、これらの新会社を通じてアスターはアメリカ人による東洋貿易の推進に先鞭をつけていった⁽¹²⁾。なお、フォート・アストリアは太平洋北西地域におけるアメリカ人最初の恒久的入植地であったという点で、またオレゴン街道やその幹線に当たる所謂サウス・パスの開拓を導いたという点で、大きな歴史的意義を持つものであった。アストリアの建設が遅れていれば、あるいは現合衆国領の太平洋岸はスペインかロシアないしはイギリスの領土になっていたかも知れないとさえ言われているのである。もっとも、アストリア建設に際しては先住インディアンとの戦闘などもあってアスターには80万ドルにのぼる損失が出たと伝えられており、この要衝の獲得は決

して安く済むものではなかった。

政治家との結びつきを存分に利用したアスターは、また未応募の公債を手に入れてこれを勝手に売りさばき、その売却利益を元手に 1812 年の対イギリス戦争への資金援助を行なったり、第二合衆国銀行の設立 (1816 年) に関わったりした。対英戦争への資金援助の目的は太平洋におけるイギリス勢力を駆逐することにあり、イギリス東インド会社を取り込んでおきながらも、やはり基本的にはイギリス毛皮商人の太平洋海域への進出はアスターにとって大いに目障りだったのである。また、政府銀行の設立への肩入れは、自分の手持ちである政府発行の有価証券が騰貴するのを見込んでのことに外ならない⁽¹³⁾。1822 年頃からアスターの政界工作には益々磨きがかかり、他人の会社は次つぎと買収・合併されて、後に「アスターズ・トラスト」と称されることになる独占状態が出現する。アメリカ史上最初の本格的トラストと言われるものである。1834 年にアメリカ毛皮会社を勇退してからはアスターはニューヨークでの不動産取引に専念し、その収益でファミリー・ホテルの連携店の先駆といわれる「アスター・ハウス」を各地につくり上げたり、図書館や公共施設への巨額の寄付を行なって江湖の話題をさらう⁽¹⁴⁾。ちなみに、上海に設けられた「アスター・ハウス」に幕末日本の若きサムライたちが逗留するのは、それから間もなく、文久 4 年 (1865 年) 正月早々のことである (後述)。

有価証券以上にアスターの財産を膨れ上がらせたのは前々から手を染めていた土地投機であった。ニューヨークが 1830 年代以降に “boom city” となったことに伴い、その人口は移民の流入により 6 万人 (1843 年) から一挙に 50 万人 (1849 年) へと激増、彼が安値で買い占めを行っていたマンハッタン島周辺の地価は、信じ難いほどの高騰ぶりを示したのである⁽¹⁵⁾。ただし「投機」とはいつても、冒険的・博打的な思いつきのものではなく、アスターの場合にはきわめて緻密で周到な企業家的計算が働いていたと伝えられる。アスターが毛皮と土地を基礎に築き上げた財産は総計およそ 3000 万ドル。半世紀前に初代大統領のジョージ・ワシントンが高だか 53 万ドル

の財産で「アメリカ最大級の大富豪」とみなされていたという史実に鑑みるなら、あるいは、アスターが世を去った当時の合衆国全体の輸出総額でさえわずかに1億4500万ドル弱（1850年）であったということに鑑みるなら、彼の蓄えた富が如何に巨大なものであったかが理解できる。フィリップ・ホーヌというある競売人は、その日記に次のような一文を書き残している⁽¹⁶⁾。

毛皮取引は、いわば現代の Croesus [紀元前6世紀の伝説の大富豪] を生み出した錬金術師の秘石であったし、ビーヴァー皮や麝香ネズミの毛皮は、いわばアラジンの魔法のランプに使われるオイルのようなものであった。アスター氏は船で中国に毛皮を運び、中国では途方もない値段で毛皮が売れて、そして彼は毛皮取引を独占した。中国からは茶や絹をはじめとした諸物産が雪崩込み、さらに途方もない利益が生み出された。氏は私と私の兄弟のお得意様で、私たちは氏の商船を幾つも売らせてもらったが、いつでも自由気ままに安心して売ることが出来た。[かのミダス王のたとえ話のように] アスター氏が触れるものはすべて金に変じ、財産は喜んで自ずと殖えつづけてゆくかのようにであった。

ところでアスターという人物は、商人とはいえ、他人に対して愛想をふりまくようなことはほとんどなく、それほど社交性に富んではいなかったと伝えられている。当代随一の富豪に申し上がり、広く世間にその名を知られていたとはいえ、一般の世人は彼の実像については何も知ることがなかった。信頼する二、三の部下に完全に実務を任せきっていたということもあるが、数千人に及んだアスターの会社の従業員たちでさえ、彼の人物やプロフィールについてはほとんど何も知らなかったのである。すでに若くしてアスターは「雲の上」の存在になっており、後にK・W・ポーターが喩えたように、「あたかも厚い毛皮のヴェールが、いつもアスターの人物像を覆い隠している」ようであった。どういう人物か良くはわからぬ男がアメリカ随一の大富豪である——。当然そこには、彼の成功譚についてのさまざまな臆測や毀誉褒貶が生まれることになる。

そうした臆測や評価の内、最も好意的と言えるのは「ジョン・ジェイコ

ブ・アスター氏は図書館、教会、修道院、その他数かずの公共施設に巨額の寄付をなした慈善家、アメリカにおいて最も成功した、ビジネスマンの鑑の如き人物であった」という、ある新聞の死亡通知欄の記事であろう。事実、晩年のアスターはニューヨーク・パブリック・ライブラリーの前身となる大図書館を建設したり、各地の教会に多額の寄付金を贈っている。晩年に至って色いろな文化事業や慈善活動を行い、孫や曾孫たちとパーティーに興じては好々爺ぶりを発揮した石油王ロックフェラーの有名な姿は、すでに1世紀前に毛皮王アスターの経歴の中に、全く同等な人間像として見られる訳である。“one of America’s best examples of self-made men,” “one of America’s wealthiest men, one of her most progressive citizens” といった表現も、幾人かの伝記作家が伝えるところである⁽¹⁷⁾。

一方、アスターの成功譚に係わる臆測の内、最も珍奇なものは、「アスターは海賊キャプテン・キッドの莫大な財宝を探し当て、それを元に今日の地位にのぼりつめたらしい」という、アスター自身が流布した説である。アスターはまた、「メイン州で観光客を相手に芸を披露して回り、それで成功を収めた」などとも吹聴している⁽¹⁸⁾。無論、こうした奇想を伴った言説は単なる作り話にしか過ぎないが、通常の者が思いつかぬような発想で自分自身の経歴を脚色したりするところに、アスターの機知と計算とが垣間みえる。

作り話はともかく、実際にはアスターの成功の鍵は上に見てきたような毛皮取引の掌握や東洋貿易の支配、それに緻密な目論見に裏づけられた土地への投機にあった訳であるが、それならば、そうした掌握・支配を可能にさせたアスター独自の性格、生活ぶりは、具体的には一体どのようなものだったのであろうか。今日では歴史上の人物の日常の生活ぶりや性格にまで入り込んだ分析が是非とも必要と思われるため、以下しばらくのあいださらに詳細な検討をつづけてみなくてはならない。ビジネスの結果や経過の分析だけではなく、そのビジネスを日々展開させた人間像や心理の問題を分析の視野に入れることが必要なのである。そうした観点に立ってアスターの性格・生活に目を向けてみると、まず彼が、兎にも角にも非常に几帳面であったことと、

何ごとに対しても驚くほどはっきりとした態度を取ったことが浮かび上がる。アスターの場合、その几帳面さ、明確さは、実は必ず何らかの利害と結びつくものであったと言われる。生真面目さと大胆さの裏に、いつも周到的な計算があったと言われていたのである。この繊細な配慮を伴った生真面目さ、大胆さは、例えば教会や修道院への寄付事業活動の中にも顕著に現われており、多額の寄付は、必ず取引を目論んでいる地域だけに限られていたという。フィッツ・グリーン・ホーレックやワシントン・アーヴィングといった当代一流の詩人・作家ときわめて親しい親交を結んだのも、純粋な文学への情熱からというのではなく、単に売名ないしは宣伝効果のためであったと噂されている⁽¹⁹⁾。「無一文から巨大な富を築き上げた大実業家」「アメリカン・ドリームを実現した典型的な好人物」として最大級の評価を受ける一方で、憎悪にさえ満ちたと思える不評や非難がアスターには常に付きまわっている。——何故であろうか？

何事につけ、アスターの決断は非常に素早く、また契約関係の事柄に関しては微に入り細に入るまで厳密に守り通す性格であった。従って、契約の変更や取り消しは、彼にはほとんど無縁であった。オフィスには早朝から出かけ、テキパキと業務を処理し、たいてい午後の2時にはそこを出払っていた。その後すぐに食事をとり、キッカリ3時までビールを飲みながらチェスを楽しんで過ごした。3時ちょうどにチェスを了えたのは、馬を駆ってマンハッタン周辺に出向き、値の上がりそうな土地を見て回るためであった。しばしば劇場通いをする、典型的な新興ジェントルマンであった。“最善をなせ Make the best of things” というのが生活のモットーで、とりわけ逆境や困難に直面した時に、どうふる舞うのが最も良いか（最も得か）を即座に判断する才能を身につけており、「どんな状況の時にどんな態度を採るべきか」は、アスターにとっては全く業務処理と同次元の問題であった。従って、何から何まで最善をなし、何につけても即座に行動し、兎にも角にも異様なほど几帳面に精密機械の如く生活をプログラムする訳ではない人びとの感覚、つまりは通常の世人の日常感覚からすれば、アスターの性格や生活ぶりには

自ずと違和感が伴い、時には嫌悪感が伴うことになった⁽²⁰⁾。

アスターに対する人物評の内、最も手厳しく露な嫌悪感を表明したのは、第12代合衆国大統領となったザカリ・テイラーによるものである。テイラーは口をきわめてアスターを罵り、「アスターの経営するアメリカ毛皮会社などは、即刻、徹底的に潰してしまう必要がある。連中は、今まで例を見ないほどの大悪党の集まりである」と断じている。確かに、急速に開拓のすすむ西部フロンティアで一時期インディアン征討戦争に明け暮れていた経験を持つテイラーとしては、イギリスやドイツやベルギーから銃器を買いつけて先住インディアンに売りつけ、巨万の富のひとつの稼ぎ口としていたアスターを許せるはずはなかったであろう⁽²¹⁾。また今日最もスタンダードな百科事典として定評のある『アメリカナ』の1981年版には、「彼の同時代人は皆、例外なく異口同音に彼のことを、身勝手に強欲で無慈悲な、要するに言ってみれば“自分のためだけになるようにお金を生み出す、一種の機械である”と伝えている」との記述が見られる。「信じがたいほどに気前の良い好々爺」とされる一方でアスターがかくも嫌われ罵られたのは、単に彼の成功に対する妬みや嫉みがあったからだけではないようである。彼の「取引の仕方」を調べてみると、ライバルの商人に対しては余りにも強引で厳格でケチ臭く、先住民に対しては余りにも冷酷なところがあった。取引相手にピタ一文もまけたことはなく、わずかな金額の取引を行うに当たっても、相手の全財産を事細かに調べ上げたりしたという。先住民に対する冷酷な仕打ちは、すでに本稿で見てきたように何もアスター一人に限ったものではないが、とりわけ彼が関わった行いには目立って大がかりで violent なところがあった可能性がある⁽²²⁾。当時、西部フロンティアの白人商人たちは皆、飲酒の習慣のなかった先住民のもとに「海賊の酒」ラムやウィスキーやブランデーを持ち込み、先住民を墮落させて回っては毛皮を詐取したり伝統社会を破壊していったりしたが、アスターの場合、そうした手口は誰よりも広範な地域に及び、しかも徹底していたとみられているのである。無法のフロンティアに続々と押し寄せた商人たちの先住民に対する詐欺的行為を見兼ねたアメリカ

政府は、時には禁酒法を出したり罰則規定を強化したりしたが、「野蛮な」先住民を保護するような法律や勧告はアスターの眼中には全くなかった。アスター自身、多くの先住民指導者たちと親しく交わってはいたが、例の如く、それはあくまでも毛皮のビジネスに役立つ場合に限ってのことであった。アスターの息のかかった会社は特にラム酒を大量に密輸入し、「贈り物」と称してはそれを各地の先住民に与え、そして彼らがへべれけに酔い潰れたところで急襲を加えて毛皮と土地とを詐取して回った。こうした行いに関し、アスター自身は「遠く離れた西部のフロンティアで社員たちがどのような行いをしているか、自分の知ったことではない」と嘯いていたが、しかし、一方では「アスターは自分の会社の伝票の一字一句に至るまで目を通し、微に入り細に入りビジネスの状況を把握している」と言われていたのであるから、先住民対策の問題に関してだけ彼が無知であったとは、到底信ずる訳にはゆかないだろう。それどころか、19世紀合衆国領の毛皮フロンティアに出回ったラム酒のほとんどが、アスターの船によって密輸入されたものとまで言われているのである。ニューオーリンズからミシシッピ河を遡ってセントルイスまでラム酒は運ばれ、そこからフロンティアの各地に送り届けられていたが、そのセントルイスには、アスターの会社の支店が早くから置かれていた。アスターの眼中には、ミズーリ河の彼方に位置するコロンビア河周辺の毛皮フロンティアしかなく、そしてコロンビア河の彼方の無限の毛皮市場としての^{カントン}広東・中国しかなかった。そのフロンティアの開拓、市場の開発によって他社の存在が目障りであれば合併すれば良いし、先住民の存在が邪魔であれば「清掃」すれば済むことであった⁽²³⁾。

さらに付言しておけば、実はアストリア周辺の先住民は、アスターの派遣した社員たちがもたらした天然痘により壊滅状態に陥っている。シベリアや大西洋岸のアメリカ東部一帯の先住民を襲ったのと全く同等な悲運が、アスターの毛皮会社の進出を機縁に北米大陸太平洋地域の先住民社会を襲ったのである。当時アメリカ西部のフロンティアでは透明なガラス瓶のコルク栓を抜いて振り回すだけで、多くの先住民は恐怖に脅え、結局は反古にされるこ

とになる白人との和平を約束せざるを得なかった。風の便りに近隣先住民の壊滅を知らされていた先住民たちは、瓶の中には悪魔＝天然痘菌が入っていると信じたからである。実際、アストリアが建設された時、アメリカ毛皮会社の一隊を指揮したダンカン・マクドゥーガルは周辺の先住民たちに小瓶を振りかざし、友好的に振る舞わなければ「天然痘菌をバラ撒いてやる」などと脅しをかけていたと言われる。最近のアメリカ・インディアン史の研究によれば、コロンブス到来以後500年間に天然痘によって「清掃」された先住民の数は、従来の研究が挙げてきた数値を遙かに上回り、数百万人、さらには2000万人にも達したであろうと推察されている。ヨーロッパ人による植民の開始以来、毛皮とアルコールと天然痘、それに銃器は、いわば「四位一体」となってフロンティアの先住民を掃滅しつつ、アスターを典型とする貪欲な毛皮商人に莫大な富を獲得させていったと言える⁽²⁴⁾。最高級の高価な毛皮の取引から得られる「もっとも低級な利害」を求めて「もっとも恥ずべき手段」がフロンティアに横行し、それが先住民社会を「狂わせはじめた」とする鋭利なコメントはわが国でも既に富田虎男氏などによって提示されている⁽²⁵⁾が、前例のない巨万の富を実現したアスターの場合には、「もっとも恥ずべき手段」は、如何ほどのものだったであろうか。なお、こうした「低級な利益」追及の方法を、日本人が同様な形で、しかも毛皮取引を通じて模倣してしまうという史実については、後に第V章で改めて論じる必要がある。ただ、それに先立ち、次には合衆国西部フロンティアに展開したアスター以外の毛皮商人の活動について、検討を加えておくことが必要である。

注

- (1) A. D. H. Smith, *John Jacob Astor: Landlord of New York*. (J. B. Lippincott Company, 1929) 13-19.
- (2) H. M. Chittenden, *The American Fur Trade of the Far West: A History of the Pioneer Trading Posts and Early Fur Companies of the Missouri Valley and the Rocky Mountains and of the Overland Commerce with Santa Fe*. (Academic Reprints, 1954) 164. 当時のアメリカにおける行商や肉商人、楽器商などの実体については研究は未だ進

展していないが、たとえば精肉業・屠殺業については、17世紀後半以後の英国における「市場革命」「農業革命」の展開を受けて、すでに相当な規模で急激に成長していたことが推察される。拙稿「欧米社会における牛肉と肉商人：商品文化史的考察」（『市場史研究』11号、1992、41頁以下）を見られたい。

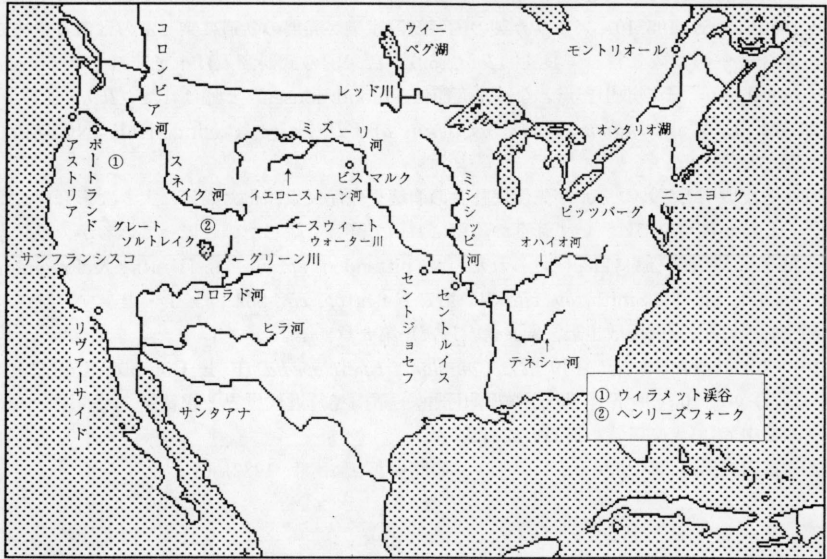
- (3) N. S. B. Gras & H. M. Larson, *Casebook in American Business History*. (Appleton-Century-Crofts, INC., 1939) 76, 81.
- (4) Smith, *op. cit.*, 27, 35.
- (5) 「50万ドル」という金額は、当時の貨幣水準から考えると少々過大な見積もりと思えるが、1800年にはアスターの財産は少なくともその半分の25万ドルには達していたと見る点で研究者の見解は一致している。H. O'Connor, *The Astors*. (Alfred A. Knopf, 1941) 14. R. Delort, *L'histoire de la Fourrure de l'antiquité à nos jours*. (EDITA S. A., 1986) 160-161. などを比較参照されたい。
- (6) Gras & Larson, *op. cit.*, 81.
- (7) O'Connor, *op. cit.*, 15.
- (8) *Ibid.*, 50.
- (9) 毛皮の他に積まれたのは、綿花や胡椒、ニンジンなどであった。開国百年文化事業会編『日米文化交渉史』（原書房、1980）第1巻、163。
- (10) Chittenden, *op. cit.*, 168.
- (11) 猿谷要『西部開拓史』（岩波新書、1982）55。
- (12) Gras & Larson, *op. cit.*, 83-87. Smith, *op. cit.*, 130 ff.. Chittenden, *op. cit.*, 166-169. アスターの設立したこれらの毛皮会社には、後にアメリカの西部開拓史に名を残す有名な mountain man が数多く所属していた。例えば太平洋毛皮会社には、W・P・ハント、A・マッケンジー、J・ミラーらが名を連ね、彼らはルイスとクラークの探検路をたどってコロンビア河口を調査、ロシア政府からも正式にアラスカでの毛皮獣捕獲の許可を得たりしている。*Ibid.*, 169.
- (13) Gras & Larson, *op. cit.*, 87-92. Smith, *op. cit.*, 121-122.
- (14) Gras & Larson, *op. cit.*, 96. より算定すれば、1789年以来アスターがマンハッタンで獲得した不動産の価値は200万ドルを超えることになるが、その内80万ドル以上は勇退してから1848年までに得たものである。尚ちなみに、ホテル・アスターは今日でも全米有数のホテル・チェーンとして名を轟かせている。
- (15) O'Connor, *op. cit.*, 50.
- (16) Smith, *op. cit.*, 100-101.
- (17) Gras & Larson, *op. cit.*, 77-78. Chittenden, *op. cit.*, 163-164.
- (18) Gras & Larson, *op. cit.*, 79.
- (19) ちなみに、アーヴィングには『アストリア』と題した作品がある。W. Irving, *Astoria*. (E. W. Todd. ed., G. P. Putnam's Sons, 1964).
- (20) Gras & Larson, *op. cit.*, 79.

- (21) C. P. Russell, *Guns on the Early Frontiers: A History of Firearms from Colonial Times through the Years of the Western Fur Trade*. (University of Nebraska Press, 1980) 58-59, 105-107. アメリカ製の国産銃器産業が発展の軌道に乗ったのはある意味でアスターのお蔭と言って良く (*Ibid.*, 59), 合衆国の武器商人はイギリスでは“blood merchants”その取引拠点となった商館は“blood houses”と呼ばれた (*Ibid.*, 107).
- (22) M. L. Wax, *Indian Americans: Unity and Diversity*. (Prentice-Hall INC., 1971) 50-52.
- (23) 毛皮取引とアルコールが先住民社会の崩壊や先住民奴隷化に如何に大きな影響をもたらしたかについては、いずれ別の論稿において詳しく論じたいと思っているが、差し当たり、次の諸文献に目を向けられたい。Chittenden, *op. cit.*, ch. IV. Ray & Freeman, *op. cit.*, ch. 11. Smith, *op. cit.*, 213-217. Nash, *op. cit.*, 252-255. J・ウルマン『ウルマンの日記』(沢田敬也訳, 聖文舎, 1977) 第8章, 第10章。
- (24) Chittenden, *op. cit.*, 619-627. *Compton's Encyclopedia*. (F. E. Compton Company, 1977) vol. 10, 498. 池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制: 大西洋システムの中で』(人文書院, 1995) 42-43.
- (25) 富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史』(雄山閣, 1982) 69.

5 アメリカ西部の毛皮フロンティア

ところで、ちょうどロシア・アメリカ会社がアラスカのシトカに本拠地を設けて(1804年)北西方向から北米の毛皮資源開発に乗り出した頃、ハドソン湾会社やノア＝ウェスターズ、そして“第二、第三のアスター”をめざす独立直後のアメリカ商人たちが大挙してミシシッピを越え、ミズーリを越えて西部のフロンティアに押し寄せようとしていた。地理的にはセントルイスから大西洋までの距離は大きく隔たってはいるが、水上交通の最大の要衝セントルイスの支配権を得たアメリカの毛皮猟師たちは、河川づたいに一举に太平洋にまで進出した。特に1812年から46年の間にかけては、合衆国の極西部 Far West は毛皮の西部 Fur West といっても差しつかえがないほどで、毛皮取引に従事したマウンテン・マンやトラッパーたちこそが、金鉱探しの荒くれやカウボーイの数をはるかに凌いでいた。日本では、特に戦後はアメリカの歴史は何よりもまず西部劇を通しての紹介がはじまったため、「西部」と言えばすなわち「カウボーイ」と受け取られるのが通例であるが、

アメリカ西部の毛皮フロンティア



ジョン・ジェイコブ・アスター

(1763年～1848年)



A. D. H. Smith, *John Jacob Astor: Landlord of New York* (J. B. Lippincott Company, 1929) より複製

カウボーイたちが西部においてポピュラーな存在となるのは、テネシー、ネブラスカの両州が鉄道利用によって肉牛提供のフロンティアとして大きく発展する 1860 年代以降のことに過ぎない⁽¹⁾。西部は何よりも、トラッパーのフロンティアとして探検・開拓がはじめられた史実が再認識される必要がある。

毛皮のフロンティアは、西部でも当初は主に河川と湖沼を利用して開拓された。独立革命以前から重要であったのは、まずハドソン・モホーク両河渓谷沿いにオンタリオ湖にまで至るルートであった。次いでワシントンよりポトマック河を遡り、ピッツバーグからオハイオ河に入る経路が植民地一帯の交易ネットワークの拠点となり、そしてアパラチア渓谷を通してテネシー河に至るルートが、独立革命の前後から最重要の地位を占めた⁽²⁾。無論、個々の猟師たちが開拓した無数のルートが五大湖からミシシッピ以東のフロンティアを覆い尽くしていた。こうしたルートの開発により、ケンタッキーとテネシーが 18 世紀の内に合衆国領となり、1790 年頃にはケンタッキーで 7 万人、テネシーに約 3 万 5000 人の毛皮商人や猟師が居住することとなった。間もなくオハイオ会社やサスケハナ会社を中心としてオハイオ渓谷一帯の開拓がはじまり、オハイオ会社の場合は、この地域で約 200 万エーカーにのぼる土地投機も行なった。同社の主要な業務は土地取引であったが、移民が増えるまでは主に毛皮業に携わり、土地価格の騰貴を待っていた⁽³⁾。アスターの場合と同様、毛皮業者には土地投機がつきものであった。

最大の画期は、ミシシッピ、ミズーリ両大河を越える時点で現われた。それはアメリカ合衆国の独立、仏領ルイジアナの購入、その地域からの先住民の放逐という一連の過程で進展した。とりわけ、ビーヴァーやキツネやヤマネコを追って毛皮資源開拓の基礎がすでに出来上がっていた仏領ルイジアナが合衆国の領土となったことにより、西部毛皮フロンティアの開拓には決定的な進展がもたらされた。その後は 1812 年に対英戦争が終結すると奴隷制綿花プランテーションの拡大熱や運河の開削熱が一挙に昂まり、それにインディアン諸族の西方への放逐（強制移住）なども相俟って「大移住 Great

Migration」と通称される移民の大波が押し寄せるに至った。合衆国の人口は 400 万人 (1790 年) → 724 万人 (1810 年) → 1287 万人 (1830 年) → 2320 万人 (1850 年) と異様なほどの急増を示し、1850 年代までに、現在の 7 割にあたる 35 の州が合衆国領に編入された⁽⁴⁾。アパラチア山脈を越えるのに 200 年以上かかったヨーロッパからの移住者たちは、ロッキーを越えるのにわずか半世紀しか必要としなかった。早くも 19 世紀の中葉までに、毛皮のフロンティアは北米大陸を覆い尽くしたのである。

1806 年には、ジェファソン大統領の命を受けたルイスとクラークの探検隊が 2 年間におよぶ調査探検を終えて、太平洋岸のコロンビア河からセントルイスへと帰還したが、その調査旅行が比較的順調に進んだのはスタッフ (黒人やショショーニ・インディアンのガイドを含んでいた) の優秀さに加え、例えばミズーリ上流イエローストーン川周辺に住んでいた有力先住民マングン・インディアンたちが探検隊に対してきわめて友好的であったことなどが大きく影響していた。探検の成功によりルイスはルイジアナ准州総督に、クラークはインディアン問題総監督に任命されて共に前途洋々たる道を歩むことになったが、クラークが栄光に包まれた生涯を過ごしたのに対し、ルイスは不慮の死を遂げた。総督としての仕事は何ひとつとしてうまくゆかず、國務省の官僚とのいさかいに不服を申し立てるためワシントンに向かう途中、強盗に襲われたという (自殺説もある)。なお、ルイス＝クラーク隊が通過した地域一円に居住していたマングン・インディアンたちは、天然痘の猛威にみまわれ、1835 年から 1860 年の間の 4 度にわたる流行のために絶滅の事態に陥った⁽⁵⁾。クラークの方はその後セントルイスで先住民問題の責任者として手腕を振り、インディアン領との境界地域の平和維持に大きく貢献したと言われるが、しかし、例えば 1812 年の対イギリス戦争の際には中立派インディアン (ポーニー、オーセイジ、スーなど) の買収工作に奔走し、親英派のインディアンを攻撃させたりした⁽⁶⁾。先住民との対立を可能な限り回避しようとしたルイス＝クラークではあったが、彼らの探検こそが合衆国北西部に居住する幾多の先住民の、以後 1 世紀近くにわたる受難のはじまり

をもたらししてしまった。

ルイスとクラークたちが帰還するや、毛皮商人・猟師たちは河川に沿って先を競うように西漸をつづけ、19世紀初頭の内にロッキー山脈にまで到達した。1807年にはセントルイスからミズーリ上流を経てイエローストーン河に至ったマヌエル・リーサがビッグホーン川の河口に有名な毛皮交易所（フォート・マヌエル）を設置し、翌年にはアスターがアメリカ毛皮会社を設立して五大湖からロッキーに至る広大な地域での毛皮業独占に着手した⁽⁷⁾。1809年にはセントルイス毛皮会社、14年にはミズーリ毛皮会社、そして22年にはロッキーマウンテン毛皮会社（30年に正式名に改称）なども設立されている。探検と移住の波がロッキー山中近辺に及ぶと、そこではいわゆるマウンテン・マンや毛皮商人によって広大な地域にわたる毛皮取引の網の目が張り巡らされ、各地に毛皮の交易所 Trading posts や商館 factories が設置されていった。ルイスとクラークの探検以後 1843 年までの時期に、ミズーリ河流域とロッキー山脈以東に設けられた交易所だけでも、およそ 140 を数えたとみなされている⁽⁸⁾。そうした交易所や商館の建設者の中から、後に西部開拓史に名を残すことになる人物や家系が輩出することになる。ここではその最も代表的な例として、シュートー、ロビドー両家の抬頭について少しふれておくことにしよう。

元もとミズーリ流域の毛皮資源の開拓は、ニューオーリンズからミシシッピ河を遡って進出したフランス商人の手によって先鞭がつけられたのであるが、ミシシッピ、ミズーリ両河の合流点に位置したセントルイスの建設に寄与した人物にピエール・ラクリード [1724 年～1778 年] という人物が居る。今日、「西部への門戸の象徴」として観光名所になっている巨大なステンレス製のゲート・ウェイ・アーチは、ラクリードが最初に交易所を開いたミシシッピ河畔の地に記念碑として建てられたものである。ラクリードはフランスのピレネーの片田舎に生まれ、1755 年にはニューオーリンズへ移住して *coureurs de bois* となっていた⁽⁹⁾。その子息がジャン・ピエール・シュートー [1758 年～1849 年]、アスターと同時代人である。ジャン・ピエールの

精力的な活動でシュート一家は一躍ミシシッピ以西の開拓史に名を馳せる代表的な名門として注目されはじめる。1764年セントルイスに進出し、異父兄オーギュストがオウセイジ・インディアンとの間に毛皮の独占的交易権を確保するや、それを統轄するためにミズーリ南西にフォート・キャロンドウレットを建設、1804年には西漸政策を企図した合衆国政府によりインディアン係官 agent に任命された。ミシシッピ以西のインディアン問題の責任者に任じられたのは先に述べたように探検の英雄ウィリアム・クラークであったが、実質的にインディアンとの毛皮取引の交渉を取り持ったのはジャン・ピエール・シュートーであった。シュートーはやがてセントルイス・ミズーリ毛皮会社を設立、陸軍少佐やセントルイス治安判事なども歴任して誉れ高い生涯を終えた。その異父兄のルネ・オーギュスト・シュートー [1749年～1829年] は元もとはラクリードの雇われ人で、1763年の8月、わずか15歳の時に30名の部下を与えられてセントルイス開拓に着手したという早熟な才人であった。19歳の時にはすでにルネの命令はラクリードの命令と同等の扱いを受け、78年のラクリードの死後には、20代でありながらセントルイスで最も重要な人物と目されるまでになった。シュートー一家が永く発展する基礎を築いたのは、このルネ・オーギュストの才覚によるところが大きい。末弟のピエール・シュートー・ジュニア [1789年～1865年] も16歳の頃より毛皮交易の責任者の地位を経験し、長じてはアメリカ毛皮会社の頭取にまで出世して数多くの事業を手がけている。なおジャン・ピエールの長男オーギュスト・ピエール・シュートーは先住民と取引契約を取り結ぶコミッショナーとして活躍し、陸軍士官学校を卒業して主にオクラホマ地域での毛皮取引に従事した。

ロビド一家は、現アイオワ、ミズーリ両州にまたがる地方の開拓に先鞭をつけた家系で、1770年にカナダからセントルイスに移住したジョセフ・ロビドーの後継者たちである。父と同名の長男ジョセフ・ロビドー [1783年～1868年] は、1809年頃から22年まで、アイオワのカウンシル・ブラッフルズ付近での毛皮取引を牛耳った人物であった。アスターがアイオワの毛

皮資源に触手を伸ばしたのを知ると、自分の權益をアメリカ毛皮会社に年1800ドルの配当と引き換えに売却し、向こう3年間は毛皮交易には関与しないことを約した。しかし後には、ブラック・スネイク川とミズーリ河の結節点を拠点に手広く毛皮の取引を再開、ミズーリ州北西端に位置する今日のセントジョセフ市の基礎を築いた。セントジョセフは、当時急激な発展をみせはじめたセントルイスの西方進出の前線基地として、重要な役割を果たすことになる。次男フランソワ [1788年～1856年] と四男ミシェル [1798年～?] については、二人がいずれもトラッパーとしてインディアン部落で生涯の大半を過ごしたため、余り詳しい経歴は知られていない。フランソワはセントルイスに設立された毛皮会社の最初の署名者に数え上げられ、兄ジョセフを助けてロビドー商会の発展に寄与すること大であった。四男のミシェルは、主にニューメキシコ並びにアリゾナ両州を流れるヒラ川 Gila River 流域からワイオミングにかけての広大な地域で毛皮の取引を行い、カリフォルニア湾にまで抜け出たと言われる。三男ルイス [1796年～1862年] は、ロビドー兄弟の中では最も浮き沈みの激しい生涯を送った。遅くとも1822年までにはサンタフェ道をたどってミズーリ河の最上流地域にまで進出し、毛皮のほか銀を取引したようである。「1824年8月にウィリアム・ハダットの一隊とグリーン川で遭遇、アラパホ族の襲撃を受けたロビドー某という名の商人」とチッテンデンがふれている⁽¹⁰⁾のは、恐らく、24年にはサンタフェに定住して大きな成功を取めたていたこの三男ルイスのことと思われる。28年頃からはじめたカリフォルニアとの取引に更に巨大な富の可能性を感じ取り、ルイス・ロビドーは44年にはカリフォルニアへの移住を決めている。サンタ・アナ河畔に約1万2000ヘクタールの広大な土地を囲い込み、現リヴァーサイド市近郊で農場経営をはじめた。当初は順調に事業を拡大したらしいが、毛皮資源の急速な枯渇もあって後には破産の憂き目に会い、土地はほとんどすべて他人の手に渡ってしまったと伝えられる⁽¹¹⁾。

シュート一家にしても、ロビドー一家にしても、共に元はフランス系商人であった点が注目されるが、一方、カナダの毛皮フロンティアを西へと開拓し

ていたハドソン湾会社やノア＝ウェスターズ、その他のイギリス、フランス系の毛皮商人たちも、ミズーリ河を遡行して北東方向よりロッキーに分け入る動きを見せはじめていた。「中国と日本に通じているはずの西部の大河」を発見することは、ジャン・ニコレ [1598年～1642年] の探検以来、実に200年近くにおよぶカナダ商人の悲願でもあった⁽¹²⁾。フランス人とインディアンとの混血児 métis はハドソン湾会社が創案した「毛皮狩猟旅団 brigade」に雇われ、「特別契約社員 engagés」と呼ばれたが、いずれも数百人の隊列をなしてカヌーや幌馬車で大挙して毛皮獣の捕獲・販売に従事したと伝えられている⁽¹³⁾。また、彼らは、ちょうどコロンブス時代の船乗りたちが奴隷狩りの歌を唄いながら出帆したのと同じように、陽気に毛皮獲りの歌を唄いながら太平洋岸や北極海近辺にまで到達したとも言われている。バーナード・デヴォトはピューリッツァ賞を受賞した或る著作の中に“Massacre: Sport and Business”という1章を設けて、ブリゲイドがスポーツの如く楽しまれるビジネスとして継続され、バッファロー（バイソン）と先住民に大虐殺をもたらした史実にふれている⁽¹⁴⁾。「オレゴンの父」と称えられ、先住インディアンにも新参の移住者にも大いに寛大な態度を保持したとされるジョン・マクローリン（マクラフリン John McLoughlin [1784-1857]）が歴史に名を届け得た一因は、このブリゲイドの経営に功績があったからである⁽¹⁵⁾。また、アスターがアメリカ史上最初のトラストを形成する程に富を蓄え得たのも、中国貿易の独占に加えてこのブリゲイドの吸収・独占があったからといわれている。もともと、一日の内におよそ100マイル（160km）も行進することがあったとされるこのブリゲイドは、ビーヴァーやリスやバッファローを怒濤の勢いで狩り尽くし、19世紀アメリカにおける生態系破壊者の先例となった。特にバッファローに対しては、当初のように毛皮を取るためにでなく、先住民の生活基盤を根絶することによって経費のかかる西部先住民の「清掃」を効率化するために、広範囲にわたって短期のうちに「絶滅策」が採用された。また一日数万頭ないし数十万頭と言われるほどの途方もない荒っぽさで手当たり次第にバッファローが狩り殺された背

景には、ニューヨークやボストンの新興富裕階級が、シチュー用のバッファローの舌を「西部特産の珍味」として重宝がったためともいう⁽¹⁶⁾。

バッファロー狩りだけでなく、オレゴンやカリフォルニアなど太平洋沿岸諸州の開拓は、当初より東部大西洋岸の大都市圏との経済的な繋がりを持っていた。オレゴン地域一帯は、元もとはハドソン湾会社が1813年以後進出をはじめた毛皮のフロンティアで、39年からはウィラメット渓谷にアメリカ商人をひき連れたメソジスト教団の定住がはじまった。合衆国系の伝道団は、牧場主であると共に農場主、そして鉱山開発業者であった。後にオレゴン準州の知事となるニューヨーク生まれの商人ジョージ・アバーンシイ [1807年～1877年] が1841年にウィラメットに最初のストアを開設すると、にわかこの地域は活況を呈し、43年からは「オレゴン熱」が蔓延して同地への大量移住がはじまった。折しも、間もなくカリフォルニアにゴールド・ラッシュ (1848年) が起こり、鉄道の建設熱とも相俟って東西を結ぶ経済圏は、南北戦争による中断を挟みながらも、急速に拡大していった。カリフォルニアはオレゴンの毛皮、木材そして穀物を買入れる恰好の市場となり、サンフランシスコ、ニューヨークにもオレゴンの物産は送られた。アストリアに代わってコロンビア河下流に発展したポートランドに電信が開通 (1864年) すると、間もなく1870年代からはイギリスに向けての穀物輸出も盛んとなるに至った⁽¹⁷⁾。

このように、北米大陸の太平洋岸一帯は、ハドソン湾会社とノア＝ウェスターズというカナダ系の毛皮商人、アメリカ毛皮会社やシュートー、ロビド一両家を代表とするアメリカ商人、それに幾多のプライベートな国籍不明の商人たちによって開拓競争が行われたのであるが、その開拓競争は、トム・クルーズ主演の映画『遙かなる大地へ』にも見られるように、馬と幌馬車を駆っての激烈な土地先取闘争を伴って展開したのもであった⁽¹⁸⁾。「5年間の定住で住居周辺160エーカー (20万坪) の土地の地主になれる」と定めたホームステッド法の成立 (1862年) は「グレート・ラン」と呼ばれた文字どおりの競走 (狂走) を呼び起こし、ゴールド・ラッシュならぬランド・

ラッシュの狂気を惹起した。先住民社会の破壊が徹底をきわめたのは、この「狂走」が時代の底流にあったためでもある。そうしたアメリカ合衆国内の動きに先立ち、すでに前世紀の60年代までに先住民社会を破壊しながらアラスカでの毛皮業を支配していたロシア商人も、先に見たように1799年にはロシア・アメリカ会社を設立し、虎視眈眈と太平洋の海岸沿いに更に南進の機会を窺っていた。スペイン系商人はそれより更に早く、94年にスペイン商事開発会社を組織してミズーリ上流での毛皮獣捕獲に乗り出していた⁽¹⁹⁾。西部フロンティアの開拓とは、まさに19世紀ヨーロッパ帝国主義による植民地争奪戦の前哨戦の様相を呈していたのであり、西部という「アメリカ国内の植民地」は、何よりも毛皮と土地と金のフロンティアとして列強諸国の垂涎的になっていた。

ところで、以上のようなアメリカ西部ロッキー山中での毛皮業の隆昌に伴い、交易所近辺の毛皮資源は急速に枯渇していった。また、定位置の交易所での取引には、フロンティア特有のさまざまな障害や制限が伴った。ポストの設置場所は概ね大型の平底船の航行が可能な河川や湖沼のある水系の周辺に限られたし、定位置ではインディアンの攻撃目標にされ易く、防備や維持には莫大な費用がかかるという難点があった。拠点を決めると、高価でしかも需要の高いビーヴァーやキツネ、ヤマネコ類はすぐに枯渇してしまうという事情もあった。

そこで、水運のない場所においても定期に取引を行い、広大で峻険なロッキー山中に四散した猟師たちを効率よく確実に集めるための新規の取引システムの確立が、ポストでの取引に代って求められるに至った。「ランデヴー」というロマンチックなフランス語で呼ばれる、毛皮の年市^{フェア}の成立であった⁽²⁰⁾。毛皮業者たちが毎年最も集まり易い地点を臨機応変に協議し、そこで毛皮取引の年市を開催しようというのである。提唱者はロッキーマウンテン毛皮会社の重役であったウィリアム・H・アシュレイ [1778年?～1838年]。ユタ州の南部グリーン・リヴァー近隣を探検し、1826年にグレート・ソルト・レイクに至って、後にミズーリ州選出の国会議員にのし上がった人

物である。

最初の「^{ランデヴー}逢い引き」は、1824年に現ワイオミング州のスイートウォーター近辺で行われたが、それは22年にアシュレイがセントルイスで募集した100名のマウンテン・マンの再集合の呼び掛けによるものであった。直接的には、アシュレイの組織した「ブリゲイド」の再度の集結手段が、ランデヴーの起源だったということになる。この計画が発展的に定期のフェアとなり、ランデヴーと通称される年市となったのである。実際に第一回のランデヴーを指揮したのはアシュレイ配下のフィッツパトリックなる猟師であったと伝えられるが、ともあれ、アシュレイ並びにロッキーマウンテン毛皮会社が組織した大規模なブリゲイドは大きな成果を上げ、すぐに模倣者ないしは敵対者が出現した。アシュレイの一派がミズーリ渓谷のナワバリを捨ててロッキー山脈の西方へと拠点を移さざるを得なかったのは、毛皮資源の枯渇に加え、例えばミズーリ会社による模倣と追い落としがあったためである。無論、こうしたライバルの出現があったからこそ、アシュレイが考案した新規の年市方式による取引はランデヴーとして制度化され、ロッキー山系一帯における毛皮業もひとつの画期を持つことになったのである。この年市は、春の狩猟期が終わって間もなくの、夏のはじめに開催されるのが通例であった⁽²¹⁾。22年にワイオミング、ユタ、コロラドの3州が交又する辺りにブラウン某の建設したブラウズ・ホール（Holeは酒蔵・酒場を意味すると同時に、罟猟師のナワバリをも意味した）でも、年に一度のGreat Rendezvousが催されて多くのビーヴァー・マンを集めたというが、そのホールでいつ頃からランデヴーが開催されていたかは詳かではない⁽²²⁾。

1825年の夏には、アシュレイ自らがグリーン・リヴァーのヘンリーズ・フォークにトラッパーやマウンテン・マンを呼び集め、Great Rendezvousを催している。このランデヴーには、北から国境を越えてハドソン湾会社のメンバーも多数参加したという。こうしたランデヴーの賑わいは数百マイル離れた猟師や移民、それにインディアンたちの間にも伝わり、いずれの年も相当な活況を呈してありとあらゆる商品が取引されることとなった。この新

種の年市は辺境地域において移住者と移住者、白人と先住民の間に物々交換やバーゲン・セールのお機を与えたばかりではなく、売春や喧嘩やお祭り騒ぎの場を与えた。何と云っても中心となったのは、狩師や鋳夫をやたらとアルコール度の強い酒で吸引した酒場 saloons であった。酒場では「飲むと脳天が吹っ飛ぶこと保証つきの酒」をはじめとして、「その場で雷に打たれるごとくぶっ倒す酒」「頭蓋骨のねじ曲がる酒」「死人を起き上がらせる酒」「目がつぶれる酒」「未亡人メーカー」「阿泉水」など、ラム酒、ウィスキー、バーボン、ジン、それに安物のワインを中心に、ありとあらゆる強烈なアルコール類が販売された。糖蜜、樹皮、唐辛子を混ぜたものや骨粉、煙草、テレピン油入り、更には、アンモニア入り、硫酸入り、火薬入りという酒まであった⁽²³⁾。酒場は謂わば、新参の荒くれが肝試しをする場でもあった。そして、多くの西部物語や西部の英雄、新種のゲーム、新しい歌や踊りなどが、このランデヴーの酒場から産み出されていった。トランプゲームの「賭け」で最も人気が高かった交換物品は、何と云ってもすでに枯渴化が相当に進展していたビーヴァーとリスの毛皮で、手持ちのビーヴァーがなくなると、下着やライフル、それに自分の妻や恋人までもが賭けの対象にされた⁽²⁴⁾。また、1832年のランデヴーなどを調べてみると、この年市は白人と先住インディアンの間の相互の復讐の場ともなっていた史実が窺える⁽²⁵⁾。酒場はやがてランデヴー以外の時にも、旅籠として、賭博場として、あるいは売春宿として西部辺境の町の中心となっていった。1827年から37年までの間に開かれたランデヴーの様相については比較的詳細な実体が知られているが、一般的には研究者の間ではすでに1839年に毛皮取引の年市としてのランデヴーは歴史から姿を消したものとされている⁽²⁶⁾。アシュレイの結集した最初のランデヴーの開催が1824年なのであるから、わずか15年そこそこの儂い「逢引き」に終わったというのである。ただし、筆者の手元には1856年のランデヴーの情景を描いた挿絵がある。ロッキーの山間では、たとえ往時の賑わいは見られなかったにせよ、幾つかのランデヴーが19世紀の半ばまでは名残を残していたものと考えておきたい。

ところで、ランデヴーというユニークな交易制度がかくも早い内に歴史の表舞台から姿を消したのは、何よりもまず、ロッキー山脈の周辺部においてビーヴァーをはじめとする毛皮資源が急速に枯渇したからであり、また鉄道の発達によって太平洋沿海諸州および鉄道周辺諸州で木材業、牧畜業、鉱業そして農業が飛躍的に発展し、そのことによって西部一帯の産業構造の重心が毛皮業からの転換を迎えたからである。アメリカ西部における乱獲の凄まじさは、シベリアやアリューシャンのコサックが黒テンやラッコを獲り尽くした勢いと同等の、あるいはそれ以上の猛烈なもので、やはり「掠奪のシステム」に基づくものといえた。アメリカのビーヴァーが具体的にはどの程度の勢いで狩り尽くされたかを示す統計的な資料⁽²⁷⁾はほとんど遺されてはいないが、枯渇したビーヴァーに次いで猟師たちの狩りの対象となったバッファローについては詳細な研究が及んでおり、そこからの類推が可能である。

バッファロー乱獲の主役となったのは、先に少しふれた「毛皮狩猟旅団」ブリゲイドである。ブリゲイドはすでに1730年代から1世紀間の内にミシシッピ以東のバッファローを狩り尽くし、北米大陸中央部の大草原地域でも1830年代から75年までの時期に同様な事態を惹き起こしていた。そしてそれからわずか30年も経たぬうちにバッファローは北米大陸全域から姿を消し、「ほとんど無数に生息した」と言われたものが、1900年には「300頭足らずしか確認されない」という有様になってしまったのである⁽²⁸⁾。かつてバッファローを生活の糧とし、その繁殖がすなわち自分たちの繁栄を約束してくれると信じていたスー・インディアン⁽²⁹⁾の聖者ブラック・エルクは、次のような嘆きの言葉をのこしている⁽²⁹⁾。バッファロー絶滅の過程で放逐され壊滅させられた多くのインディアンたちが、もし目撃し体験した史実についての証言の機会を与えられていたとしたなら、おそらくほぼ同等な証言をいくつも遺したはずであろう。

まだ数えきれないほど多くのバイソン [バッファロー] が居た頃のことを、私は覚えている。ところが、ますます多くのワシチュー (白人) どもが、バイソンを殺しにやって来て、ついに彼らが居たところには骨

の山しか残らなくなってしまった。ワシチューはバイソンを食べるために殺したのではなく、ただ、彼らを気狂いにする金属 [金] のために殺したのだ。彼らは、ただバイソンを殺して皮を剥ぎ、それを売った。時には、皮さえも取らず、ただ舌だけを切り取った。乾かしたバイソンの舌をいっぱい積み込んだ蒸気船が何隻もミズーリを下っていったそうだ。そんなことをした人びとは、頭が狂っている、と思うのは当然の道理だろう。そして、時には、彼らは舌さえも取らなかった。彼らは殺しに殺しを重ね、ただ殺すことが楽しくて殺したのだ。私たちがバイソン狩りをした時には、私たちは必要なバイソンを殺した。しかし、バイソンが殺し尽くされて骨の山しか残らなくなってからも、ワシチューはまだやって来て、今度はその骨を集めて、そしてそれを売った。……もしもワシチューの道の方が優れているのなら、[インディアン]の民たちも彼らと同じ道を行くべきではないかとさえ思ったことがある。今では、そのような考えが馬鹿げたものだとわかっているが、あの頃の私は、まだ若かったのだ。

バッファローをかくも大量に獲り尽くすために採用されたブリゲイドは、元は「旅団」とか「隊」を意味する言葉で、先に述べたように数百人もの隊をなし、ライフルで武装し、カヌーや幌馬車で大挙して西部に押し寄せた罽獵師とマウンテン・マンの「大軍」であった。インディアンとフランス系カナダ人の混血児は、永い経験から、厳しいフロンティアでの飢えや長期の放浪生活に耐える技術と忍耐とを身につけており、ブリゲイドの「進軍」になくはならない存在と言われた。そのためもあって、ブリゲイドに係わってはフランス語が幾つも用いられた⁽³⁰⁾。“brigade”という英語自体フランス語からの派生語であるし、カヌーからの荷物の陸揚げは *décharge*、荷物の運搬は *portage* といわれた。ブリゲイドのリーダーたちは「ブルジョワ」と通称されて恰も封建領主のような絶対的な権限を持ち、他のメンバーたちに対して「パトロンであり、保護者であり、そして神であるかのようにふる舞う者もあった」と伝えられている⁽³¹⁾。ブリゲイドのメンバーは *engagés*

で、アスターの率いたアメリカ毛皮会社は、ハドソン湾会社と *engagés* との結びつきを遮断することに腐心したことで西部毛皮産業を支配できたのであった。ブリゲイドを牛耳ったアメリカ毛皮会社は 1840 年には 6 万 7000 枚のバッファローの毛皮をセントルイスに送りつけ、48 年には 11 万枚の毛皮と 2 万 5000 枚の舌を運んでいる。そうした折、1850 年から 60 年にかけて何度かミズーリ上流を訪れたヘイデン博士 (Dr. F. V. Hayden) は、「間違いなく、毎年 25 万頭ものバッファローが意味もなく殺され、10 万頭がただ毛皮を得るために殺されている」とバッファローの大殺戮の場面を目撃談として記録にとどめたのである⁽³²⁾。別な資料によれば、1850 年にはウィニペグ南方レッドリヴァーの流域では、800 台ないしは 1000 台の幌馬車隊がバッファロー狩りに狂奔し、一人あたり一日に 250 頭、一年間では一人あたり 2 万 5000 ないし 3 万頭ものバッファローを捕獲したという。ビーヴァーが獲り尽くされてすでに久しい 1870 年代ともなると、バッファロー狩りは西部フロンティアにおける一種の「花形産業」となるに至り、71 年には、ヘイデン博士の目撃談の通り、25 万枚のバッファローの毛皮を売りさばいた毛皮会社もあった。それどころか、翌 72 年には、バッファローの取引量は「合衆国全体では一日ないし二日間の内に 20 万枚にも達した」とさえ言われている⁽³³⁾。そして更に、先住インディアンたちが保留地の中に押し込まれてブリゲイドによるバッファロー狩りが一層放漫となった 1880 年代には、「草原にはバッファローの死骸が積み重なり地面が見えない」と形容されるような事態にさえなった。この時、ブリゲイドの隊員たちは望遠鏡つきの新式のライフルや連射銃でバッファローを殺戮して回ったのであり、「ただ楽しむためにだけ殺した」のである。「その気があれば、バッファローの死体を踏んで 20 マイル (約 32km) も歩きつづけることが出来ただろう」といわれ、ピラミッド状に積み上げられたバッファローの頭蓋骨の山が延々 20km にわたり続くこともあった。1881 年には、ダコタ准州のビスマルクの町から出荷されたバッファローの皮革は実に 50 万頭分に相当した。人の背丈を越すほど堆く積まれた生皮の上には、無数の秃鷹や渡り鳥が「雲のように群が

った」と伝えられている。アメリカにおける毛皮の世界フロンティアは、ここに「略奪のシステム」としてきわまりをみせた訳であるが、こうした生態学的な危機は、一般には、後の時代になってしまってから、とり返しのつかない壊滅的な危機としてだけ確認されるのが通例なのかも知れない。

こうした驚異的な出荷量の「激増」は、とりもなおさずバッファローの「激減」の凄まじさを意味していた。先に見たように、「ほとんど無数」と言われたバッファローは、82年には前年の半数以下の20万頭、83年にはわずか4万頭、翌84年には300頭……という具合に、余りにも急激に絶滅していった。85年には良質の皮が一头分75ドルという高値で売られるようになり、90年代には、……まさにブラック・エルクが証言していたように……、生きたバッファローが絶滅してしまったために仕方なくその骨を拾って売り歩く白人が出回ることになった。バッファローの骨は、砕いて肥料にすると、1トン当たり8ドルないし12ドルで売ることが出来たからである⁽³⁴⁾。あらゆる毛皮獣やバッファローの骨さえもが枯渇しはじめてからは、中国に向けてアヘンを売ったりアジア人を買入れて人身の売買に狂奔する不屈き千万の輩が横行することになったともいわれるが、それも、ブリゲイドを組んでバッファローと先住民への大量殺戮を展開した無法のフロンティア世界の延長と考えるなら、自ずと理解もできるのである。

なお、先住民の中にもわずかなお金やアルコールを得るためにバッファロー狩りに協力した者があった。そうしたインディアンたちは、バッファローの舌をブリゲイドの正式隊員よろしく無闇やたらと捕獲して回り、それと交換に安酒や、場合によっては銃器・衣類などを与えてもらったのである。その場合の「安酒」というのは、大抵は石鹼入りの^{まが}紛い物で、ほんの少量で酔いが回ったためにインディアンたちには「上質アルコール」とのふれこみで売りつけられたものであった。ちなみに、これと同じ頃、アイヌの人びとが和人の持ち込む安酒欲しさにエゾシカ狩りに狂奔したという史実が北海道で展開する⁽³⁵⁾が、それは、アメリカ西部のフロンティアにおいてインディアンたちが白人のバッファロー狩りに手を貸したのと相通ずる性格のものだっ

たと言えるだろう。「着るためや食べるためにではなく、売って一時の金を得るために際限なく獣を狩る」という資本の論理とアルコールとは、毛皮のフロンティアにおいて、太平洋の西でも東でも、先住民社会の壊滅を伴ったのである。

そうした弊害を内に含んだ歴史の怒濤が、破竹の勢いで北米大陸のフロンティアを席捲し、またシベリアのフロンティアをコサックの軍団が駆け抜けて、いわば「毛皮の世界フロンティア」が太平洋の北端において「結び目」を持ったまさにその時、鎖国下に眠りつづけていた日本が世界史の舞台に登場することになる。ペリーの艦隊が来航した頃には、すでに毛皮交易の全盛時代は終熄しており、綿花や金や鯨を追い求める動きが日本の鎖国体制を打ち破ったと見るのが常識的な見解ではあろう。しかし、次章において考察するように、ペリー来航時にあっても毛皮交易の担った役割は決して小さなものではなかった。幕末期の海外のいくつもの新聞が、日本の市場を何よりも「毛皮の市場」と指摘していた史実や、幕末・明治の日本における毛皮製品の浸透と毛皮獣乱獲の開始という史実に鑑みるだけでも、新たな視点から解明されなければならない問題は数多く残されている。毛皮の「世界フロンティア」は、極東・日本においてこそ完結するものとみななくてはならない。

注

- (1) 詳しくはさしあたり前節注(2)の拙稿「欧米社会における牛肉と肉商人」41頁以下を参照されたい。なお、「毛皮商人や毛皮猟師はどの地域にも定住者に先がけて進出した」という史実がアメリカ史を概説した好著（例えば有賀貞『アメリカ史概説』東京大学出版会、1987、172-176頁）ですでに指摘されているながら、具体的にその毛皮商人・猟師・マウンテンマンの「進出」の実体にふれた邦語文献はR・ナッシュ『人物アメリカ史』（足立康訳、新潮社、1989）など若干のものを挙げ得るにとどまっている。
- (2) F. G. Walett, *Economic History of the United States*. (Barnes & Noble, INC., 1962) 75-78.
- (3) J. P. Boyd, "Connecticut's Experiment in Expansion of the Susquehanna Company: 1753-1803." (*Journal of Economic and Business History*, vol. IV, 1931-32) 38-69. A. M. Josephy, Jr. ed., *The American Heritage Book of Indians*. (American Heritage Publishing Co., INC., 1982) 198-199. 今津晃『アメリカ革命史序説』（法律文

- 化社, 1960) 200. ちなみに, オハイオ会社の最大のパトロンは初代大統領ワシントンの家系で, アメリカ議会は, このオハイオ会社が債務支払不能となった折に, 約100万エーカーの土地につき所有権を認める決定を下したことがある。P. W. Gates, "The Role of the Land Speculator in Western Development." (*Pennsylvania Magazine of History and Biography*, LXVI, 1942) 314-333. R. A. Billington, "The Origin of the Land Speculator as a Frontier Type." (*Agricultural History*, vol. 19, 1945) 204-222.
- (4) 西漸運動と合衆国の人口・領土の増大の推移については, ひとまず鈴木圭介編『アメリカ経済史』(東京大学出版会, 1972) 第2章第2節を参照されたい。
- (5) Josephy, Jr., ed., *op. cit.*, 260-263. Chittenden, *The American Fur Trade of the Far West*, (Academic Reprints, 1954) 859-861.
- (6) W・T・ヘーガン『アメリカ・インディアン史』(西村頼男ほか訳, 北海道大図書刊行会, 1983) 84。
- (7) マヌエル・リーサ [1772年～1820年] はニューオーリンズ生まれの毛皮商人で, 1808年にアンドリュウ・ヘンリーやジャン・ピエール・シュートーらと共にミズーリ毛皮会社を設立した人物として知られている。少なくとも12度にわたるミズーリ探検を敢行し, 南北両ダコタ州の各地に交易拠点を設置している。Chittenden, *op. cit.*, 125-136. さらに詳しくは R. E. Oglesby, *Manuel Lisa and the Opening of the Missouri Fur Trade*. (Norman, 1963). なおリーサからウィリアム・クラーク宛ての書簡が「毛皮商人とインディアン」というサブタイトルを付して翻訳されている。本間長世解説『アメリカ・インディアン』(研究社「アメリカ古典文庫」14, 平野孝訳, 1977) 222-226。
- (8) Chittenden, *op. cit.*, 947.
- (9) ラクリードとセントルイスの建設の係わりについては *Ibid.*, 97-112.
- (10) *Ibid.*, 506-507.
- (11) シュートー, ロビドー両家の活動については, Oglesby, *op. cit.* の他, J. E. Sunder, *The Fur Trade on the Upper Missouri: 1840-1865*. (Norman, 1965).
- (12) R・A・スケルトン『図説・探検地図の歴史』(増田義郎・信岡奈生訳, 原書房, 1991) 263。
- (13) métis たちは, 北米西部・北西部の開拓史において大きな役割を果たしたが, その重要性についてはほとんど研究は及んでいない。本格的な文献としては, M. Giraud, *Le métis canadien, son rôle dans l'histoire des provinces de l'Ouest*. (Paris, 1945). および J. S. H. Brown, *Strangers in Blood: Fur Trade Company in Indian Company*. (University of British Columbia Press, 1980). の2著作を挙げ得るのみである。特にラテン・アメリカ開拓史との比較などにおいて, この学問的な空隙はひとつの問題点となるように思える。
- (14) B. DeVoto, *Across the Wide Missouri*. (Houghton Mifflin Company, 1947) 80-92.
- (15) マクローリンは元ハドソン湾会社のオレゴンにおける取引代理人で, 毎年10万ドル

に相当する毛皮をイギリスへと送っていた。その波乱の生涯と人物像の一端については、すでに邦訳文献で紹介がある。M・L・コイト『西部開拓』（清水知久訳、LIFE「合衆国の歴史」第4巻、時事通信社、1965）87-91。また、このマクローリンは次章3でみる通り、微妙な形で日本の開国に係わる人物となる。

- (16) ブリゲイドについては、L. D. Baldwin, *The Stream of American History*. (2 vols., Richard R. Smith Publisher, Inc., 1952) vol. 1, 520. G. Bryce, *The Remarkable History of the Hudson's Bay Company*. (Bart Franklin, 1968) 302-312. を参照。バッファローの驚異的な乱獲については、J・ナイハルト『ブラック・エルクは語る：スー族聖者の生涯』（弥永健一訳、教養文庫、1977）244-247。藤原英司『アメリカの動物滅亡史』（朝日選書、1976）17-20。同『アメリカの野生動物保護』（中公新書、1976）40-52。およびJ・コスター『この大地、わが大地：アメリカ・インディアン抵抗史』（清水知久訳、三一書房、1977）144-145。等によって、概要を知ることが出来る。
- (17) A. L. Throckmorton, *Oregon Argonauts: Merchant Adventurers on the Western Frontier*. (Oregon Historical Society, 1961). 書名に入っている Argonaut とは、元は「金の羊毛」を求めて遠征したギリシアの勇士の伝説に因む言葉であるが、アメリカではカリフォルニアのゴールド・ラッシュに殺到した「49年組 forty-niners」を意味する単語でもある。Argonaut の子孫から幾人かの石油王や鉱山王が輩出した史実を省みると、アメリカ史におけるその Argonaut の意義の大きさが理解できよう。
- (18) ロン・ハワード監督『遙かなる大地へ』（UIP, 1992）。『朝日新聞』（1992年6月18日付）などに鑑賞評がある。なお、アカデミー賞受賞映画『シマロン』でも「ランド・ラッシュ」が扱われている。
- (19) ただし、スペイン勢力は1795年のピンクニー条約によって北米植民地経営の基盤を失い、合衆国が代って「政府商館 government-operated trading houses」の制度を確立して毛皮取引の公営化を図る事態となった。1822年に至ると、その政府商館制度も廃止され、プライベートな猟師たちによって無秩序な乱獲合戦が繰り広げられた。その乱獲合戦は、1845年の北米毛皮産業からのイギリスの撤退にまで帰結した。P. C. Phillips, *The Fur Trade*. (University of Oklahoma Press, 1961).
- (20) 以下しばらく、拙稿「毛皮取引とランデヴァー：アメリカ西部における毛皮フロンティアの開拓と年市」（『市場史研究』第7号、1990）30-36. に大幅な加筆を試みて論をすすめる。
- (21) Baldwin, *op. cit.*, 519-520. J. Monaghan, et. al., *The Book of the American West*. (Bonanza Books, 1963) 22-82, esp., 56-69.
- (22) R・アードーズ『大いなる酒場：ウェスタンの文化史』（平野秀秋訳、晶文社、1984）50-51。
- (23) 同上訳書、第7章。
- (24) 鶴谷寿『アメリカ西部開拓博物誌』（PMC出版、1987）74-85。
- (25) DeVoto, *op. cit.*, 47-79. J. Monaghan, et. al., *op. cit.*, 66-69.

- (26) J. T. Adams, ed., *Dictionary of American History*. (Charles Scribner's Sons, 1946).
“Trappers Rendezvous” の項目。
- (27) 概数としては、19 世紀初頭の内に「年間 20 万枚以上のビーヴァー皮がアメリカからイギリスへと送られていた」という。Chittenden, *op. cit.*, 821.
- (28) 実際には、6000 万ないし 7000 万頭居たと推測されている。
- (29) J・ナイハルト『ブラック・エルクは語る：スー族聖者の生涯』（弥永健一訳、現代教養文庫、1977）244-247。
- (30) ちなみに、フランス語では憲兵隊や警察の班のことを brigade [brigad] と言い、brigade d'infanterie (歩兵旅団), général de brigade (陸軍准将), brigadier-chef (騎兵・砲兵長), brigadier (騎兵・砲兵の上等兵) など、軍隊用語で brigade を用いるものが幾つかある。
- (31) Baldwin, *op. cit.*, 520. Bryce, *op. cit.*, 302-312.
- (32) Chittenden, *op. cit.*, 817.
- (33) 藤原英司『アメリカの動物滅亡史』（前掲）17-20。
- (34) 藤原英司『アメリカの野生動物保護』（前掲）40-52。J・コスター前掲訳書、144-145。
- (35) 藤原英司『北加伊エゾシカ物語：北海道の環境破壊史』（朝日新聞社、1985）236-237。